

フレデリック・ダグラス著

『私の隷属と私の自由』（一八五五年）

第十五章～第十六章*

堀 智 弘

第十五章 奴隷調教師コヴィ

新しい主人のもとへの旅立ち～その途中で考えたこと～コヴィの住処の外観～その家族～野良働きとしての著者の不慣れさ～ひどい鞭打ち～なぜ鞭打たれたか～コヴィの人物像～はじめての雄牛引きの試み～際どい回避～雄牛と人間は同様に財産～コヴィの鞭打ちのやり方～精神を打ち砕くには鞭より重労働が効果的～コヴィの悪知恵と策略～家庭内礼拝～貞節への驚くべき軽視～著者うちのめされる～自分自身の奴隷状態と船たちの自由を対比してひどく動揺する～筆舌に尽くしがたい苦悩

一八三四年の一月一日の朝、わたし自身の心の冬にひどく似つ

* 本稿はJSPS科研費JP21K00384による研究成果の一部である。

かわしい凍える風と身を切るような寒さのなか、肩に担いだ棒の端に小さな衣服の包みを揺らしながら、わたしは幹線道を、主人トマスから否応なしに行くことを命じられた場所であるコヴィのもとへ向かっていた。主人は言葉通りに行動する人物であり、躊躇なくわたしをコヴィ氏の管理下に委ねたのだ。わたしがタッカホーの祖母の小屋から引き離されてから八年か十年が過ぎていて、その年月の大部分を――読者はすでに見てきたように――比較的扱いの穏やかなボルチモアで過ごしてきた。このときわたしは、奴隷生活のより深遠な深みを味わおうとしていた。戦場よりも耐えがたい野良仕事の厳しさがわたしを待ち構えていた。わたしの新しい主人はその獰猛野蛮な性格で知られており、彼と同居するにあたってわたしを慰める唯一のものは、彼が一般的な名声によってまさに示されているとおりの人物なのは確実ということだけであった。この圧政者の家を探して出発した際、わたしの心

に喜びはなく、わたしの歩みに軽やかさはなかった。飢餓ゆえにトマス・オールドのもとを離れることは喜ばしく、非情な鞭打ちゆえにコヴィのもとへと赴くことは恐ろしかった。逃亡は不可能であったので、コヴィの家をセント・マイケルズから分かつ七マイルを、わたしは足取り重く悲嘆して歩いて行った——その孤独な道のりではたくさんのことを考えながら——自身の置かれた状況を忌み嫌いつつ——だが、考えることしかわたしにはできなかったのだ。網にかかった魚がひとときは遊ぶことが許されるように、わたしはいまやあらゆる点で縛り付けられてすばやく陸揚げされようとしていた。「わたしは」と考えた、「我が福利厚生や幸福をまったく考慮しない力の思うがままではない。はつきりとは理解できないが避けることも抵抗することもできない法則によって、愛する祖母の炉辺から無慈悲にもさらわれて、見知らぬ『老主人』の家庭に送り込まれた。またもやそこから引き離されてボルチモアの主人のところへ送られて、そこから、野原の獣たちと一緒に査定され、獣たちと一緒にひとりの所有者に分与されるために東岸へと連れてこられた。それからボルチモアに送り返され、そして新たな親愛関係を築き、さらなる乱暴な衝撃はもう自分には訪れないでほしいと望み始めたところに、兄弟間にいさかいが生じたため、またもや引き離されてセント・マイケルズに送られた。そしていま、この最後の場所から、新しい主人の家へと歩みを進めている。そこでは、飼いならされていない若い使役動物のように、調教されて生涯続く過酷な隷属のくびきかけられるのだと言い聞かされている。」

このようなことを考え思案していると、幹線道から一マイルほ

ど入ったところで、木材そのままの色合いの小さな建物が見えてきた。出発の際に受けた説明からして、それが新しい我が家であることは容易にわかった。チェサピーク湾——その突き出た岸辺にこの小さな木材色の家は建っていた——強い北西の風であおられた泡沫で湾は白くなっていて——この半分は海の情景のなかでくつきりと際立つ黒く密生した松林に覆われたポプラ島——そして、泡の冠を戴いた湾へと砂漠めいた砂嘴を延ばしているケント岬——がすべて眼前に見えていて、新しい我が家の荒廃寂寥たるさまを深めていた¹。

ボルチモアから持参した上質な服はいまでは擦り切れてしまい、取り替えられていないままだった。というのも、主人トマスは、飢えに対する場合と同じく、寒さに対しても必要なものをわたしたちに支給しようという配慮はほとんどなかったからである。雨風を遮るもののない四十マイルを旅してきて、ここにきて北風に吹かれていたので、どこでも寄港できるのはうれしかった。なので、わたしはこの小さな木材色の家に足早に向かった。

所帯を構成していたのはコヴィ夫妻、ケンプさん（腰の曲がった女性）、コヴィ夫人の女きょうだい、エドワード・コヴィのいとこであるウィリアム・ヒューズ、料理人のキャロライン、雇われ人のビル・スミス、そしてわたしであった²。ビル・スミス、ビ

1 ケント岬はチェサピーク湾最大の島であるケント島の南端。ポプラ島はケント島の南に位置する小島。

2 エリザベス・ドイル・ケンプ（一七八七年頃没年不詳）はおそらく、その息子ジョンからエドワード・コヴィが貸借していた農場に隣接する農場の所有者であった女性。ビル・スミスは近隣の農園主サミュエル・ハリソン（前章の注参照）が所有していた奴隷で、一八三四年にエドワード・コヴィに召使いとして貸し出されていた。

ル・ヒューズ、そしてわたしが三、四百エーカーからなる農場の労働力であった。いまやわたしは人生ではじめて野良働きになろうとしていた。そしてわたしは、この新たな仕事をやるとなると、都会生活の途方に暮れさせるような場面に田舎の青二才がはじめて参入する際に想定されるであろう以上にもっと不慣れであり、この不慣れさはわたしに多くの困難をもたらした。奇妙で不自然に思われるかもしれないが、わたしが新しい我が家に来てわずか三日にして、コヴィ氏（メソジスト派教会ではわたしと信徒仲間である）は、どんなものがわたしを待ち構えているのかについて、苦々しい前触れとなる経験をわたしに味わわせたのだ。おそらく彼は、自分の仕事をやり終えるのに一年しかないので、早く始めるほどよいと考えたのだろう。ひよっとすると彼は、わたしたちはすぐさま殴り合うことで、自分たちの関係をお互いによりよく理解できると考えたのかもしれない。しかし、直接的あるいは間接的などのような動機に起因しようとも、わたしが彼の支配下に入ってまるまる三日もたたないうちに、彼はまったく情け容赦ない折檻をわたしに加えたのだ。彼の重い殴打のもとで血がとめどなく流れ、背中には小指ほどの大きさの鞭打ち痕が残った。この鞭打ちによる背中の痛みは、シャツとして着ていたごわした粗目の布で傷口がこすられて閉じなかつたため、数週間にもわたって続いた。新しい主人コヴィがいかに理不尽であるか、また残忍であるかについて読者が了解できるように、野良働きとしてのわたしの経験のこの最初の章のきつかけと詳細を話さなくてはならない。このことすべては、この人物の特徴を物語るように思えたのであり、おそらく、わたしの主人がわたしを彼に委ね

るように促されたのと同様の理由で以前に彼に預けられた数十人の若者たちよりも、わたしが悪い扱いを受けていたわけではないだろう。だが、この出来事に関連する諸事実は、それらが起こったとおりに正確に述べれば、こうである。

一八三四年の一月をつうじて最も寒かったある日、わたしは夜明けどきに、家から二マイルほどの森から木材の積荷を取ってくるよう命じられた。この仕事の遂行のために、コヴィ氏はわたしに一組の未調教の雄牛を与えた。というのも、彼の調教の能力はこの方面には振り向けられていなかった、ということのようである。ついでに言っておけば、南部の使役動物は北部ほどによく訓練されることはまれである。正しい手順にのっとって、そしてすべてのあるべき儀式を踏んで、わたしはくびきにつなされた一対の巨大な未調教の雄牛に引き合わされ、どっちが「バック」でどっちが「ダービー」なのか——どっちが「手前側」でどっちが「奥側」の牛なのか入念な説明を受けた。この重要な儀式の司会進行役はほかならぬコヴィ氏本人であり、その説明は、この種のものとしてはわたしはじめて受けた説明であった。それまでの人生では角のある家畜には縁がなく、そうした家畜を管理する術についてなんの知識もなかったのだ。二頭両方が同等にひとつの荷車、ひとつのくびきにくくりつけられているときに、「奥側の牛」に対して「手前側の牛」とはどういうことなのか、あまり容易に推察することはできなかった。それに、この名称に示される二頭の違い、そしてそれぞれの役割は同様にわたしにはちんぷんかんぷんであった。どうして「奥側の牛」は「手前側の牛」とは呼ばれないのであろうか？ 事物それ自体には違いはないのに、

このように名称の違いが生じる理由はどこにあるのか、どのような理由なのか？コヴィ氏は「とまれ」、「うしろへ」、「右へ」、「こつちへ」といった言葉——牛と牛引きとのあいだで話される言語のすべて——について手ほどきしたのち、長さ十フィートほど、太さ一インチほどの一本のロープを手にとって、「手前側の牛」の角にロープの片端をくくりつけ、もう片方の端をわたしに渡して、もし牛たちが走って逃げようとしたら——この非道漢はそうなると知っていたのだが——ロープにしがみついて牛を止めるんだぞと言った。飼い慣らされていない雄牛の力や気質をわかっていて人には言う必要もないことであるが、この命令は、猛り狂う闘牛を肩に担げという命令と同じくらい理不尽であった！わたしはそれまで雄牛を引いたことがなく、そのため、想像できるように、牛引きとしては不慣れであった。わたしの無知をコヴィ氏に訴えるのは無益なことであった。彼のふるまいにはそうしたことを断固としてさせないところがあったのだ。彼は、奴隷がめつたに話しかけたいと思わないような人物であった。冷たく、よそよそしく、むつつりしていて、気まぐれな高慢さと敵意ある厳格さを示すありとあらゆる特徴を帯びた顔で、取り入ろうとする試みをすべてはねのけた。コヴィは大柄な男ではなく、身長五フィート十インチほどであったと思う。首が短く、丸みのある肩まわりをしていて、素早く強靱な動きで、引き締まって狼狽した顔つきをしていた。緑がかった灰色の小さな目が額の下に威厳なく引っ込んで常に動いていて、彼の思考というよりも感情をあたりに誇示しているのだが、そうした感情が言葉として発せられないようにしていた。この者は絶対的に残忍で不吉な容貌、極

度に不愉快で人を寄せつけない容貌をしていた。彼が話すとき、口の端から、犬が骨を奪われそうになったときのような、ある種の軽い唸り声で話すのだった。この人物は、以前から聞いていた以上にたちが悪い、ということをおぼろげに思っていた。彼の指示を受けて、質問の時間をとることもなく、はじめの牛引きを見事にやってみせようと意気込んで、わたしは森へと出発した。家から森の入り口までの距離——まるまる一マイルはあったと思う——はさほどの困難なく通過した。獣たちが走っても、開けた場所であれば、特にロープの端で引っぱってくれるので、牛に遅れをとらないくらいわたしは俊敏であった。だが、森に到着すると、すぐさまひどい苦境に陥った。獣たちが怖がって、森のなかへ猛烈に突進しはじめたのだが、全速力で荷車をひっぱってそれが木々にぶつかり切り株を乗り越えるのもものもせず、あちらへこちらへとすつ飛んでいくさまは本当に恐ろしいものであった。わたしはロープをつかんでいたために、牛たちがそのあいだを猛烈に突進していた巨大な木々と荷車のあいだに挟まれて潰されてしまうことをたえず覚悟していた。牛たちは数分間にわたってこのように走ったあと、一本の木にたいへんな勢いで突っ込んでいき、荷車をひっくりかえし、若木の茂みからまって、やっと停止した。この衝撃で、荷車本体は一方に、車輪と長柄は別の方向にふつとばされてめちゃくちゃになってしまった。なにもわからない深い森のなかでわたしはひとりきりであり、荷車はひっくりかえってばらばらで、牛たちはからまり、怒り狂い、手が付けられなかった。そしてわたしはいえば——哀れな者よ！——この混乱すべてを収めるには新米にすぎなかった。

わたしは、牛引きが学問について知らないのと同様に、雄牛について知らなかった。立ち上がって損害と混乱を数秒間かけて見定めたのち、この困難のあとには輪をかけて苦しい困難がやってくるといふ予感にとらわれつつも、荷車本体の片方に手をかけて、せいっぱいの力で、荷車本体が激しくふつとばされて外れてしまった車軸に向けて持ち上げた。かなりひっぱったり力を入れたりして、やっと荷車本体を正常な位置に戻すことに成功した。これは困難から抜け出すための重要な一歩であり、これができたことで、まだやらなくてはならない作業への勇気が得られた。荷車には斧があつて、この道具はボルチモアの造船所でかなり使い慣れていた。これを使って、牛たちがからまつていた若木の茂みを切り倒し、移動を再開したが、牛たちの物分かりの悪い頭に、まともやはしゃぎまわりたい気持ちが出てきやしないか気が気でなかった。わたしの懸念は杞憂であつた。さしあたり彼らの浮かれ騒ぎは終わりであり、この悪党たちは、そのふるまいが以前から自然で模範的であるかのごとくに落ち着きはらって歩んだ。前日に木を切り倒していた森のなかの場所に到着すると、牛たちがふたたび走りださないように荷車に重い荷を積んだ。しかし、牛の首は強さでは鉄に匹敵する。興奮すると、普通の積荷ではどんなものものともしない。雄牛はよく訓練されていれば評判になるほどおとなしく従順だが、くびきをつける調教が半分しかなされていないときには、最も不機嫌で手に負えない動物である。

わたしは自分の状況に牛たちの状況との類似点をいくつか見出していた。牛たちは所有物であり、わたしもそうであつた。牛たちは調教を受けるべき存在であり、わたしもそうであつた。コヴィイはわ

たしを調教しなくてはならず、わたしは牛たちを調教しなくてはならなかった。調教し、調教される——人生とはそういうものである。一日の半分はすでに終わっていたが、いまだ家路についていなかった！コヴィイがこのような明白な時間の浪費を何事もなかったかのように見逃してくれるはずがないことは、わずか二日間の経験と観察だけで了解できた。そのため、わたしは家路を急いだのだが、小道の門にさしかかったとき、その日最大の災難に見舞われた。この門は南部の職人芸のよい見本であつた。粗切りで四角形の直径十八インチの巨大な柱二本が立っていて、その一本に重い扉がついていたのだが、本来開くべき距離の半分しか開かなかった。ここに到着すると、「手前側の牛」の角にかけられたロープの端を手から離さなくてはならなかったのであるが、扉を開き、またロープを持つとうと扉から手を離れた瞬間、牛たちが走り出した——積荷などものともせずに——全速力である。その際、彼らは車輪と荷車本体のあいだに扉を引っ掛けたので、扉は文字通り粉々になつてしまい、あと数インチでわたしも同様の目にあうところであつた。車輪が左側の門柱にぶつかったとき、わたしは車輪のすぐ前にいたのだ。こうした際どい回避が二回あつたので、コヴィイ氏に遅延の理由をうまく説明すれば、懸念される懲罰から逃れられるとわたしは思った。この困難な仕事を成し遂げるにあたってわたしがみせた断固とした決意ゆえに、ほめられるのではないかといかすかな希望もないわけではなかった——あとでわかつたことだが、これは、牛たちを森につれていくための準備として、まずは開けた場所であつた。彼らがある程度のあいだ引いてやるということなしには、コヴィイ本人でさえやろうとは思わな

い仕事であった。しかしこの期待は裏切られた。彼のところに行くと、その顔には厳しい不満があらわれていて、わたしが行程中に起こった事故の経緯を述べると、緑がかつた目をした彼の狼めいた顔は激烈な凶暴さを示した。彼は「もう一度、森に戻れ」と言い、ほかに時間を無駄にしたことについてぶつぶつぶやいた。わたしは急いで従ったが、遠くまで進むまえに、彼が追ってきていることに気づいた。牛たちはいまではきわめてお行儀よくふるまっていて、その現在の行動は彼らの以前の狂態についてのわたしの説明とはかけ離れていた。コヴィイがやってきたので、彼らの特徴としてわたしが述べたことと一致するようになにかを彼らにやってくれないかとほとんど望んだほどであった。だが、彼らはお楽しみの時間をすでに満喫したので、いまでは格別によい子でいられるだけの余裕があり、わたしの命令に喜んで従って、わたし自身と同じくらい命令をよく理解しているようにみえた。森に着くと、わたしを苦しめるこの人物——道すがらずと、自分の雄牛たちのきちんとしたふるまいを注視してきたようであった——はわたしに近づいてきて、荷車を停止するよう命じ、おれがお前を森にやるたびに、どうやって扉を壊して、時間を無駄にするか教えてやるぞと脅しを付け加えた。コヴィイは言葉に違わずに行動に移り、その強靱な物腰で、一本の大きなヌマミズキの木の方へ歩いていった。その若木は非常に丈夫なので、牛追、棒として一般に使われるものである。彼は自分の大きな折りたたみナイフで、四、六フィートの長さのこうした棒を三本切つて形を整えた。これが終わると、わたしに服を脱ぐように命じた。この理不尽な命令に対してわたしは返答せず、服を脱ぐことをあくまで

拒んだ。「もしお前が僕を鞭打つつもりなら、服の上から打て」とわたしは考えていた。数多くの脅しにもかかわらず、わたしが動じないでいると、彼は狼の残忍な凶暴さを思わせる様子でわたしに向かつて突進してきて、わたしが身につけていたわずかなすりきれた服を剥ぎとり、ヌマミズキの木から切つてきた重い棒がわたしの背中で擦り切れるまで棒を打ちつけはじめた。これが一連の鞭打ちの最初であり、非常に過酷ではあったが、そのあとの多くの鞭打ちに比べればそこまで過酷ではなかった。しかも、それらの鞭打ちは扉を壊すことよりもずっと軽微な過誤によるものであった。

わたしがコヴィイ氏のところに行ったのは一年であり（彼と一緒に生活していたとは言えない）、その最初の六ヶ月のあいだは毎週、棒もしくは牛革の鞭で打たれた。骨のうずく痛みとひりひりする背中がわたしの常なる伴侶であった。鞭は頻繁に用いられたが、わたしの精神を打ち砕く手段としては、鞭よりも長時間のきつい労働の方をコヴィイ氏は重んじていた。忍耐力の限界まで彼はわたしをたえず働かせた。朝の夜明け時から、夕刻の闇が深まりきるまで、わたしは田畑あるいは森でのきつい労働に従事させられた。一年のある時期には、わたしたちはみな、夜の十一時、十二時まで田畑にいた。こうした時期には、コヴィイは田畑でわたしたちを監視して、言葉にせよ殴打にせよ、彼にとつて最善と思える方法で、わたしたちをせきたてるのであった。彼はその人生において奴隷監督だったことがあり、奴隷使役人の仕事をよく理解していた。彼を欺くことは不可能であった。彼は成人男性や少年がどんな仕事ができるのかわかっており、どちらに対しても厳格

に責任を課した。その気になったときには自分でも仕事をするが、その仕事ぶりはまさしくトルコ人のごとくで、彼の前ではすべてが飛ぶように片付いていくのだった。しかし、彼の仕事はせつせとなされるために、コヴィ氏が実際に田畑にいる必要はほとんどなかった。彼が常にそこにいるかのようにわたしたちに感じさせる能力が彼にはあったのだ。彼が実践する一連の巧妙に練られた不意打ちによって、わたしはいつでも彼に遭遇することに對して身構えるようになっていた。彼の計略は、雇人が働いている場所にはけつして開けつ広げの男らしい直接的なやり方で近づかないというものであった。どんな泥棒もこの男コヴィほど、狡猾に策略を用いることはなかった。彼は溝や水路に身を潜めて忍びより、切り株や茂みのうしろに隠れてへびのごとき悪知恵をあまりに実行するので、ビル・スミスとわたしは——二人だけのときには——彼のことを「あのへび」としか呼ばなかった。彼の目や足どりになにかへびを思わせる特徴を見出すことができるような気がわたしたちにはしていたのだ。彼の黒人を調教する技術の堪能さの半分は、この種の悪知恵にあったと思われる。わたしたちは心の平安を感じる事がなかった。彼はほほいつでもわたしたちを見たり聞いたりすることができた。彼はわたしたちにとつて、農園のありとあらゆる切り株や木や茂みや柵のうしろにいる存在であった。彼はこの種の策略をどこまでも追求して、とき々自分の馬に乗ってセント・マイケルズまで行くそぶりをみせておきながら、三十分後には彼の馬は森でつながれていて、へびのごときコヴィは溝に横たわつて頭だけその縁の上に出したり、あるいは柵の端に身を隠したりして、奴隷たちのすべての動作を見

張っていることもあった！あたかも数日間不在にする予定で家を離れるかのように、わたしたちのところに近づいてきて、仕事についての特別な指示を前もつて与えたこともあった。彼は家までの距離の半分もいかないところで、わたしたちが彼の動きに注意を払っていないことをいいことに、不意にくるりと踵を返して、柵の端や木のうしろに身を隠し、陽が沈むまでわたしたちを見張っていたのだ。こうしたことすべては卑劣で軽蔑すべきであるが、奴隷所有者の生活が生みだすべく特性に合致している。奴隷の境遇のなかには、彼を熱心に労働させるような現世的な誘因が存在しない。懲罰に対する恐れだけが、彼が少しでも勤勉となる唯一の動機である。奴隷所有者が承知しているように、この事実をわかつていて、奴隷を自分自身で判断するとき、この恐れの原因がないときにはいつでも、奴隷は怠惰となるだろうという当然の結論に至るのだ。そのため、この恐れを呼び起こすために、あらゆる種類のこざかしい策略が用いられるのである。

しかし、コヴィ氏にとつて策略は天性であった。教養や宗教のかたちで彼が身につけていたありとあらゆるものは、この半分生来的な性質にかなうようになっていた。こうしたやり口に男らしくくない、下劣な、もしくは軽蔑すべきところがあるとは彼は思っていないようであった。それは彼にとつて重要な機構の一部、主人と奴隷の關係に不可欠なものであった。わたしは、まさに彼の宗教的勤行のなかに、彼の性格のこの支配的要素が見てとれると思つていた。夜の長い祈禱が朝の短い祈禱を埋め合わせていて、これ以外の仕事がないときの彼ほど信心深くみえる人はほとんどいなかった。

コヴィ氏にとつて、こちらの寒い地方でなされているような、簡単な祈祷で始まり終わる、そつけないやり方の家庭内礼拝では不十分であった。いや！彼の家では、祈祷に加えて礼賛の声も、夜も朝も聞こえていなければならなかった。当初はわたしもこうした勤行に加わるように命じられていたが、コヴィからの度重なる鞭打ちの結果、これらすべてはばかばかしいことに成り下がってしまった。彼はひどい歌い手だったので、家族のために讚美歌を歌う役目は主にわたし頼りで、わたしがうまくできないと、彼はひどい混乱に陥った。こうした失敗のために彼がわたしを虐待したことはなかったと思う。彼の宗教は彼の世俗的な関心とはまったく別物であった。彼は宗教について、自身の日常生活を方向づけ律する神聖な原理、世俗的関心を福音の要請にかなうものにさせる原理としてはまったくわかつていなかった。一つか二つの事実を挙げることで、一般的なことが記された一冊の本を読むよりも、彼の性格がうまく例証されるであろう。

エドワード・コヴィ氏が貧乏人であったことはすでに述べた、あるいは示唆した。実際、彼は、奴隸州で資産とみなされるような意味での資産の基礎を築き始めたばかりであった。この地域における富と社会的地位の第一条件は人的資産の所有であるため、貧乏人はそれを手に入れるためにあらゆる努力をし、どのようにそれを手に入れるのかについてはほとんど注意が払われることがない。コヴィ氏は敬虔ではあったが、この目的を追求するために

3 詩篇137:16「わたしたちを捕囚にした民が歌をうたえと言うから」を想起させる。ダグラスは一八五二年のよく知られた演説「奴隸にとつて七月四日とは何か」のなかで聖書のこの一節を引用している。

は、彼の隣人たちのうちでも最悪の部類に匹敵するほど節操なく下劣な人物となった。最初は、彼ができたのは——彼が言うように——「一人の奴隸を買う」だけであった。この事実も恥ずべきで衝撃的であるが、彼女をたんに「産ませ役として」買ったのだと彼は誇らしげに言っていた。しかし、この露骨な表現に込められた最悪の部分はまだ話していない。この若い女性（キャロラインというのがその名前であった）は、コヴィ氏によって、彼が彼女を購入した目的に挺身するように実質上強いられたのだ。そしてその結果として、その年の終わりに双子が誕生した。このように人的資産が増えたため、エドワード・コヴィとその妻スーザンは喜びで有頂天であった。この女性を咎めだてよう、あるいは子供たちの父親である雇われ人——ビル・スミス——を非難しようとはだれも夢にも思わなかった。というのも、コヴィ氏自身がこの二人を毎晩一緒にして閉じ込めたことにより、この結果を招いたからである。

しかし、この吐き気を催させる話題についてこれ以上は話さない。キリスト教徒を公言するこの奴隸所有者が、自らの家のなかで、祈祷と讚美歌に囲まれながら、彼の人的資産を増やすための手段として、公然の紛れもない姦淫を恥気もなく誇らしげに奨励し、実のところ強制していたという事実以上に、奴隸制のみだらで非道徳的な性質を物語るものは見つからない。ここで述べておいてもよいと思えるのは、この事実は北部では嫌悪感と恥ずかしさをもって読まれるであろうが、南部においては、コヴィ氏の賢明さと殊勝さを示すものとして、笑いとばされるだろうということである。そこでは、女性を買って彼女をこの恥辱の生活に陥れても、雌牛を買ってそこから家畜を増やすことが非難されないの

と同様に、非難されることはないのだ。前者の数と質を向上させるといふ目的の場合でも、後者の場合と同じ規則に従っていると
いうわけである。

ここで、この悲惨な場所でのわたし自身の経験について、十年以上前に述べたことを再録しよう。

「我が人生のどの時期よりも、奴隷制の最も苦々しい苦汁を嘗めさせられた時期があったとすれば、それはコヴィイ氏とともにあった最初の六ヶ月であった。どんな天候でも、わたしたちは働かされた。どんなに暑くても寒くても、雨や風や雪や雹がどんなに激しくても、田畑で働かないことはなかった。働け、働け、働けと、昼間とほとんど同然に夜間にも命じられた。彼にとつては、どんなに長い昼も短すぎ、どんなに短い夜も長すぎるのであった。わたしが最初にここに来たとき、いささか反抗的なところがあったのだが、こうした規律を数ヶ月にわたつて受けた結果、おとなしくさせられてしまった。コヴィイ氏はわたしを調教するのに成功したのだ。わたしは体、魂、精神にいたるまで調教されたのだ。わたしの生来の快活さは打ち砕かれ、知性は衰弱してしまった。文字を読みたいという気持ちは消え失せ、わたしの眼差しに垣間見えていたはつらつとした輝きは失われてしまった。奴隷制の暗い夜がわたしを包みこんだのだ。見るがいい、人間が野獣へと変わり果てたさまを！

日曜日はわたしの唯一の余暇の時間であった。わたしはこの時間を、ある大きな木の下で、眠っているとも起きているともつかない、ある種の野獣めいた呆然自失状態で過ごした。ときおり、

力強い自由の閃光が魂のなかをさつとかすめ過ぎていき、わたしは立ち上がることもあった。この閃光にもなつて、希望のかすかな光線が一瞬だけまたたくのだが、それもやがて消え去るのであった。わたしはふたたび腰を下ろし、自身の惨めな状況を嘆いた。ときに自分の命、それにコヴィイの命を奪い去つてしまいたいという気になるのだが、希望と恐れがないまぜになつて押し止められた。この農園でのわたしの苦しみは、今になつてみると過酷な現実というよりも夢のように思える。

わたしたちの家はチェサピーク湾から十数メートルのところ建つており、その広い海原は、世界中の人が住めるあらゆる場所からやつてきた帆船でつねに白く色づいていた。まっさらな純白を装ったこれらの美しい船舶は、自由民の目には非常に快いものであるが、わたしにとっては屍衣をまとつた幽霊の大群であり、わたしに自らの惨めな境遇を思い起こさせることで恐怖と苦しみを与えた。わたしはしばしば夏の安息日の深い静けさのなかで、この気高い湾の岸辺にひとりきり立ち、無数の帆船が大海原へと乗り出していくさまを、沈んだ心と涙に濡れた目で追つたのだ。こうした光景はいつもわたしの心を激しく突き動かした。思いがつい口をついて出てきてしまうのだ。なので、全能の神以外に聴衆はいないこの場所で、わたしは自分なりの不器用なやり方でではあるが、うごめく船の大群に向けて、魂の嘆きを吐き出した。

『お前たちは舳いから解き放たれて自由なのに、僕は鎖にしっかりつながらて奴隷のままだ！お前たちは穏やかな風のまえで楽

しげに動いているのに、僕は血まみれの鞭のまえで悲しげに身を動かしている！お前たちは世界を飛びまわる自由の迅速なる翼の天使、なのに僕は鉄の紐帯に閉じ込められている！ああ、自由だったらいのに！ああ、お前たちの立派な甲板の上に、覆いとなってくれる翼の下にいられたらいいのに！ああ悲しいかな！僕とお前たちのあいだには混濁した波々がうねっている。行くんだ、行くんだ。ああ、僕も行けたらいいのに！せめて泳げたらいいのに！飛べたらいいのに！ああ、なぜ僕は野獣になる定めの人間に生まれてきたのか！あの楽しい船は行ってしまった。かすむ遠くへ消えてしまった。僕は終わることのない奴隷制の灼熱の地獄に取り残されている。ああ神よ、僕を救いたまえ！神よ、救い出してください！僕を自由にしてください！神などいるのだろうか？なぜ僕は奴隷なのだろうか？逃げ出してやるぞ。耐えるつもりなどない。つかまろうと、逃げおおせようと、やってみるさ。熱病で死ぬくらいなら、マラリアで死んでやるさ。失う命などひとつしかないんだ。ただ立ちつくして死ぬくらいなら、逃げ殺されてやるさ。考えてみる、百六十キロまっすぐ北に行けば、僕は自由だ。やるか？やるさ！神の助けを得て、やってやるさ。奴隷として生きて死ぬなんてありえない。水路を行ってやる。まさにこの湾が僕を自由へと導いてくれるはずだ。蒸気船はノース・ポイントから北東の航路を進んでいた⁴。僕も同じこと

4 ノース・ポイントは、ボルチモア近隣のパタプスコ川とバック川に挟まれた半島の南端にあたる。ノース・ポイントから北西に航路をとればボルチモア、北東に行けばチェサピーク湾の北限、ひいてはデラウェアやペンシルベニアとの州境近くに至る。

をしてやる。それで湾の奥に着いたらカヌーを乗り捨てて、まっすぐデラウェアからペンシルベニアまで歩いていこう。そこに着いたら外出許可証を持つていない必要はないはずで、邪魔されることなく動けるだろう。最初の機会が訪れたら、なにがあらうと出発だ。それまでは、くびきをかけられていても耐えてやるさ。世界でただひとりの奴隷というわけじゃないんだから。悩む必要なんてあるかい？僕はだれよりも忍耐力があるんだ。それに、僕は子供にすぎず、子供はみんなだれかからの束縛を受けるものだ。奴隷制での不幸は、自由になったときの幸福をかえって増してくれるかもしれない。もつといい日がくるさ。』⁵。

コヴィイのところのいた期間に、わたしが味わわなければならなかった精神的経験を物語ることは絶対にできないだろう。わたしは完全に廃人同然で、変わり果て、途方に暮れていた。あるときにはほとんど狂気に陥らんばかりになり、またあるときには自分の惨めな状態を甘んじて受け入れていた。ボルチモアで親切として経験したことすべて、この世で有用な存在になりたいという以前の希望や抱負、それに宗教的勤行に費やした幸福な時間は、その時現在のわたしの運命と対比されて、苦悶を深めるだけであった。

わたしは精神的にだけでなく、肉体的にも苦しんだ。日曜日以外は、食事の時間も寝る時間も十分になかった。過度の労働、それにわたしが受けていた情け容赦ない折檻は、わたしを常に苛ん

5 ダグラスの一八四五年の第一自伝の第十章からの自己引用。

で喰らい尽くさんばかりの考え——「僕は奴隷だ——一生奴隷だ——正気の頭で考えたら自由の希望などもてる理由のない奴隷だ」——と組みあわさって、わたしを精神的肉体的悲惨の生ける権化へと変えたのだ。

第十六章 圧政者の悪のもう一つの圧力

コヴィイ家での経験のまとめ、最初の六ヶ月が後半よりも過酷く変化についての前置き、経緯を説明する理由、踏み庭での場面、著者、病に倒れる、コヴィイの異常な残忍さ、著者、セント・マイケルズに逃げ出す、追跡、森での苦しみ、コヴィイのもとへと追いつ返される、「主人トマス」の態度、奴隷は決して病気にならない、奴隷が仮病を使うと思うのはもつとも、奴隷所有者たちの怠惰

前の章は、そこで述べたおぞましい出来事と衝撃的な特徴とともに、コヴィイ家での我が人生の最初の六ヶ月についての正しい描写と想ってもらって構わない。コヴィイ氏がわたしに処した調教の過程の最初の時期の苦々しい経験を、読者が真に思い描くためには、コヴィイがわたしを無慈悲な鞭打ちにさらした森のなかでの場面を、週に一回、心のなかで反芻しさえすればよい。わたしが彼の暴力と残忍さの犠牲となった個々の出来事を再現しようという気持ちはない。そのような描写をしようとすれば、この本よりもはるかに厚い本でないと収まりきらないであろう。わたしが目指しているのは、痛ましい詳細で読者を不必要に苦しめることなく、奴隷としての我が人生について事実即した印象を読者に与えることだけである。

コヴィイのところに行った最初の六ヶ月のあいだは、その年の残りの期間よりも、苦難がずっと大きかったと別の箇所ですでに示唆したとおり、また、わたしの境遇の変化は、奴隷制の過酷な窮境のもとに置かれた人間本性について、読者がよりよく理解する助

けとなるかもしれない原因によるものだったので、この変化の経緯を述べよう。そうすることで、自分の勇気を自画自賛しているかのようにみえるかもしれないが。

親愛なる読者は、わたしが屈服させられ、卑しめられ、うちのめされ、隷属させられ、野獣にまで貶められるさまを見てきて、それがどのようになされたのかについてお分かりだ。ここで、こうしたことすべての反転、そしてそれがどのように起こったのかについて見ていこう。そうすることで、わたしたちは一八三四年の終わりまで話を追っていくことになる。

今しがた述べた年の八月のひどく暑いある日のこと、もし読者がコヴィイの農場のなかを通り抜けていったとしたら、かの地で「踏み庭」と呼ばれている所で、わたしが働いているのを目にしていたかもしれない——踏み庭というのは、馬が足で小麦を踏んで茎から脱穀する場所のことである。わたしはそこで「唐箕」を動かす作業をしていた——あるいはむしろ、ビル・スミスが唐箕に風を送り込んで動かしているときに、わたしが小麦を入れる作業をしていた。作業にあたっていたのはビル・ヒューズ、ビル・スミス、そしてイーライという名の奴隷で、この最後の人物はこの作業のために雇われていた。仕事は単純で、技能や知性よりも腕力と活力を必要としていたが、こうした仕事にまったく慣れていない者にとっては非常にたいへんであった。暑さは厳しく朦朧とさせるほどで、この日に脱穀された小麦を唐箕に入れ終えてしまおうとかなり急いでいた。というのも、もしこの仕事の日没の一時間前に終われば、コヴィイの約束によれば、働き手たちはその一時間を夜の休みの時間に加えることができることになっていた

た。わたしも日没前にこの日の仕事を終えてしまいたいという願望では負けていなかったもので、作業を推し進めようと全力で頑張っていた。平日に一時間の休みをもらえるという約束は、わたしの歩みを早め、いつも以上の努力を促すのに十分であった。そのうえ、わたしたちはみな、釣りに行く予定を立てており、当然ながらわたしもそれに加わりたいと思っていた。だが、わたしの期待は裏切られ、その日はそれまでに経験したなかで最も苦しい日のひとつとなった。三時ごろ、太陽がその焼けるような光線を浴びせかけ、少しの微風も吹いていないときに、わたしは倒れたのだ。体の力が抜けてしまい、ひどい頭痛、それに伴い極度のめまいに襲われ、体じゅうがぶるぶると震えていた。自分が陥りつつある状態を悟り、作業を止めるのはよくないと感じたので、自らを奮い立たせてふらふらになりながら仕事を続けたが、地面が自分に向かって倒れてくるような感覚とともに、ついに唐箕の傍らに倒れてしまった。このため、すべての仕事は完全に停止してしまった。四人分の仕事があつて、各自に遂行すべき役割があり、それぞれの役割は他の役割に依存していたので、ひとりが止まってしまうと、全員が止まらざるをえないのであつた。コヴィは、このころにはわたしの迫害者であるだけでなく、恐怖の的にもなっていたが、わたしが唐箕の作業を行っている所から百ヤードほど離れた家におり、唐箕が動く音が聞こえなくなるとすぐに踏み庭にやってきて、作業が止まった原因を聞いた。ピル・スミスが彼に、わたしの具合が悪くて、小麦を唐箕にもう運ぶことができないと伝えた。

このときまでには、わたしは支柱に横木を通した柵の横の日陰

に這って入っていたが、ひどく具合が悪かつた。太陽の厳しい暑さ、唐箕から巻き上がるひどいほこり、庭から小麦を拾い上げるための前傾姿勢、さらに仕事を終えるための急ピッチの作業もあつて、頭に血が昇ってしまったのだ。このような状況で、コヴィはわたしがどこにいるのか知つて、わたしのところまでやってきた。そして、立ったままわたしを少しのあいだ見下ろしたのち、どうしたんだと尋ねた。わたしは話すことも難しかったが、できるかぎり彼に説明した。彼はわたしの横腹に、全身に衝撃が走るほどの容赦ない蹴りを入れ、立ち上がれとわたしに命じた。わたしに対するこの男の支配は完全なものとなつていたので、わたしができることを彼が命じていたのであれば、このときのわたしの心理状態であれば、それに従おうと努めたであろう。

わたしは立ち上がろうと努力したが、二本足で立つまえに倒れてしまった。この人でなしはここでもう一発、わたしに重い蹴りを加え、立ち上がれともう一度命じた。わたしはもう一度立ち上がろうと試み、二本足で立つことに成功したが、唐箕まで小麦を入れて運ぶための桶を取ろうとかがむと、ふたたびよろめいて地面に倒れてしまった。倒れた結果として、百発の弾丸で撃たれるだろうと確信していたとしても、このように倒れてしまつていたに違いない。わたしがこのように情けない状態で横たわり、完全に体の自由が利かなくなるときに、無慈悲な奴隷使役人は、小麦が半ブッシュェルの計量器の縁と水平になるようにさつと振り落とすためにヒューズが使つていたヒッコリー材の板（非常に堅い武器である）を手に取つて、その鋭いへりのところで、わたしの頭に重く一撃をくらわせた——頭に大きな裂傷ができ、血がとめどなく

流れた——と同時に、「頭痛がするなら、おれが治してやるぞ」と言った。これが終わると、彼はわたしにもう一度、立てと命じたが、わたしはそうしようとはしなかった。というのも、立とうとしても無駄だ、この冷酷な怪物は今度こそ最後までやるかもしれない、せいぜい僕を殺せばいいさ、そうすれば僕の惨めさも終わってくれるだろうさ、と覚悟を決めたからであった。コヴィは、わたしが立ち上がれないと悟り、あるいはそれをあきらめて、わたし無しで仕事を続けようと離れていった。わたしはかなり大量に流血していて、温かい血ですぐに顔じゅう血まみれになった。この一撃をもたらした動機は残忍で無慈悲だったとはいえ、親愛なる読者よ、この傷はわたしにとって幸運であった。出血がこれほどまでに効果的だったことはなかった。頭痛はたちまち和らぎ、すぐに立ち上がれるようになった。すでに述べたように、コヴィはわたしを運命に委ねて立ち去っていたので、残る問題はこうであった。仕事に戻るべきか、それともセント・マイケルズまで行って、オールド船長に彼の兄弟信徒コヴィの非道極まる残虐行為について話し、別の主人を見つけてくれるように懇願すべきだろうか？彼がわたしをコヴィの管理下に置いたそもそもの目的、さらに我が哀れないとこへニーに対する彼の無慈悲な扱い、そして自分の奴隷に衣食を給する際のケチさを思い起こすと、トマス・オールド船長がわたしを好意的に迎え入れてくれるのを期待できる理由はほとんど見当たらなかった。にもかかわらず、彼が人道的な動機によって突き動かされることはなくとも、自己中心的な考えからわたしのために介入しようという気にさせることはできるかもしれないと思い、オールド船長のところへ向

かうことに決めた。「自分の財産がこのようにあざだらけでほろほろ、傷だらけで台無しにされることを彼が許すはずがない。だから彼のところに行つて、このことについてありのままの真実を話してやろう」と考えたのだ。セント・マイケルズまで最も歩きやすい直通の道だと七マイル歩く必要があったが、わたしのひどい状態では、これは簡単なことではなかった。すでに多量の血を失っていて、力をふりしほって動いていたため疲労困憊していた。コヴィ氏の頑丈なブーツで重い蹴りをくらった横っ腹は痛んでいた。あらゆる点で、遠出するには不都合な窮境にあったのだ。しかし、残忍で狡猾なコヴィが逆方向を向いているあいだに、わたしは機会を見計らつて出発し、田畑を超えてセント・マイケルズへと向かった。これは果敢な一歩であった。もしこれが失敗すれば、コヴィを激昂させ、彼のもとでの残りの貸し出し期間のわたしの奴隷生活はもっと過酷になるだけであるうが、この一歩は踏み出され、わたしは前進しなければならなかった。森に向かつて、広い田畑を半分近くまで通り抜けるのに成功したところで、コヴィ氏がわたしの姿を認めた。出血は止まっておらず、走つて体を動かしたことで、血があらたに流れだしていた。「戻れ！戻るんだ！」とコヴィが大声で呼びかけ、もしわたしがすぐに戻らなければどんなことが待ち受けているか、脅し文句を叫んだ。しかしわたしは、彼の呼びかけや脅しを無視して、自分の衰弱状態が許すかぎりの速さで森へと急いだ。わたしが止まる気配がないのを見ると、コヴィは自分の馬を出してきて鞍を付けるように命じた。彼はどうやらわたしを追跡するつもりの方であった。いま競走しても不利なだけであり、もし幹線道を行けば

追いつかれるかもしれないと思い、見つかって追跡されるのを避けるために、道のりのほぼすべてを森のなかで幹線道から十分な距離をとって歩いた。しかし、遠くまでまだ進んでもいないところで、わずかな体の力がまたしても失われてしまい、わたしは倒れた。頭の傷からはまだ血が滲みだしており、しばしのあいだ、筆舌に尽くしがたい苦しみを味わった。わたしは深い森のなか、病んで衰弱し、卑劣漢——その吐き気を催させるほどの残忍さきたたら、どんな罵り文句でも不十分である——に追われ、流血して、ほとんど血の気もなかった。出血で死んでしまうことへの恐怖がないわけではなかった。多くの苦難と困難にもかかわらず、森のなかでひとりつきりで死ぬという考え、そしてハゲタカどもによってこなごなに切り裂かれるという考えはいまだ耐えがたかった。なので、木陰や夕べの涼しい風が、わたしのもつれた頭髪と一緒にあって、血の流出を止めてくれたときには嬉しかった。わたしがそこに横たわっていたのは四十五分ほどで、そのあいだ、自分に課せられた特異で嘆かわしい運命について思いをめぐらしていると、わたしの精神は神の絶対的な摂理への信仰から暗澹たる無神論にいたるまで、信心と不信のすべての段階を経た、もしくは一巡りしたのだった。その後、トマス・オールドのもとからコヴィイ氏の家に向かったあの朝よりも疲れきり悲嘆しながら、セント・マイケルズへの道のりを再開した。わたしは裸足で帽子も上着も身につけていなかった。湿地やイバラの茂みを通る道のりのため、道中で足を傷つけることもしばしばであった。目的地までの七、八マイルを行くのに、まるまる五時間かかった。それは道が悪かったためもあるし、病気や怪我や失血で体が

弱っていたためもあった。主人の店に到着すると、石のように冷淡でなければどんな心も突き動かすほど、哀れで悲痛な姿を晒した。頭のとっぺんから足の裏にいたるまで血痕が付着していた。髪の毛はすべてほこりと血で固まっており、シャツの背中と同じく血で文字どおりこわばっていた。イバラや棘で足は脚部全体まで傷つき切り裂かれており、血痕が残っていた。仮にわたしが虎のねぐらから脱出したとしても、セント・マイケルズに着いたときほどひどいありさまにはなりえなかっただろう。わたしはこのような惨めな状態で、キリスト教徒を公言する主人のまえに姿をあらわし、彼の力と権威の介入により、さらなる虐待と暴力から守ってくれるようにへりくだって懇願したのであった。セント・マイケルズへの長く苦しい道のりの最後のあたりには、以前にわたしが考えていたよりも、オールド船長がもっと気高い面をみせてくれるのではないかと、わたしは期待を抱きはじめていた。だが期待は裏切られた。わたしは沈みつつある船から海に飛び込んだのだ。虎から逃げた結果、もっと悪いものに出会ってしまったのだ。わたしはすべての状況をできるかぎり詳しく彼に説明した。いかにわたしがコヴィイを喜ばせようとしていたか、目下の作業ではどれだけ頑張っていたか、暑さと苦役と苦痛で倒れたことがどれだけ不本意であったか、どんな容赦ないやり方でコヴィイから脇腹を蹴られたか、頭に深い切り傷ができたこと、苦情を訴えることで彼（オールド船長）を困らせることへの躊躇、だがコヴィイがときおり犯す非道な行いを彼に隠すのはもはや最善ではないと思つたこと、こうしたことを説明した。主人トマスは当初、わたしが受けた虐待の話に多少なりとも心を動かされたようにみ

えたが、すぐに自分の感情を押し殺して鉄のように冷酷になった。彼にとつても——わたしが彼のまえに最初に立ったときには——無関心をよそおうのは不可能であった。わたしが経験したような事例を可能にした奴隷制に対して、彼の人間本性がその確信を表明しているのはつきりと見てとれたのだ。しかし、すでに述べてように、人間性は奴隷制の組織的な圧政のまえに倒れてしまった。彼は最初、どうやらわたしの話と悲惨なありさまにかなり動揺した様子で床を歩きまわっていたが、しばらくすると今度は彼が話す番となった。コヴィに有利な口実を見つけることから穏やかに話を始め、コヴィの完全な擁護とわたしへの熱のこもった非難で話を締めくくった。「お前が鞭打ちに値するのをわたしはまったく疑っていない。お前が病気だとは思わない。お前はたんに仕事をサボろうとしただけだ。お前のめまいは怠慢で、コヴィがやったように、お前を鞭打ったのは正しい。」彼はこのようにわたしをひどくとつちめ、自身の雄弁で自らを奮い立たせたあとに、今回お前が俺にどうしてほしいのか言ってみると強く迫ったのだ！

わたしが抱いていたすべての希望に対して、このような完全なる大打撃が彼から加えられ、自分が完全に彼の力に服従していると感じ、わたしは返答する気力をほとんどあわせなかった。彼がわたしにぶつけてきた数々の主張について、自分には罪がないと言ひ張ることは許されなかった。そのようなことをすれば無礼とされ、おそらくあらたな怒りと暴力を招くだろうからである。いつでもどこでも、奴隷の側に非があることが仮定され、奴隷所有者や奴隷の雇い主の無罪が常に主張されるのである。この

仮定に反する奴隷の言葉は、無礼で処罰に値するとみなされるのが通例である。「口答えするつもりか？この悪党め」と言われれば、奴隷の口からの反対陳述は最終的に沈黙させられてしまうのだ。

わたしの沈黙とためらいを見て、そしておそらくわたしが呈している悲惨な様子を素早く一瞥したことで、彼は多少落ち着きを取り戻し、「お前はわたしに何をしてほしいんだ」ともう一度尋ねてきた。このように再び訊かれたので、わたしは主人トマスに、新たな働き先の家庭と新たな主人を見つけてほしいのですと述べた。もう一度コヴィ氏と一緒に生活するために戻ったら僕は確実に殺されます、彼に対する苦情をあなたのところにもっていったことを彼はけつして許さないでしょう、彼と一緒に生活して以来、僕の精神はほとんど打ちのめされていて、これでは今後の仕事に役立たなくなるくらい僕はずたばろにされるに決まっています、彼の管理下では僕の命は安全ではありませんと述べたのだ。主人トマス（教会での我が兄弟）はこうしたことを「ばかばかしい」と切つて捨てた。「コヴィ氏がお前を殺す危険などない。」彼は善良で、勤勉で、信心深いのだから。だからわたしをあの家から他に移すなど考えるつもりもないと。「それに」と彼は言った——これこそ彼にとつて最大の悩みのものであることがわかったのであるが——「もしお前が、所定の一年の半分しか過ぎないのにコヴィのところを離れたら、そのまるまる一年分のお前の給与をわたしは損することになる。お前は一年間コヴィ氏のものだから、なにがあるうと彼のところに戻らないといけない。これ以上コヴィ氏に関する話でわたしを煩わせるな。もし

すぐに戻らなければ、わたしが自分でお前を罰してやる。」これは、わたしに咎があるという申し立てに対して彼がはなから判断を下している、とわかったときに予期したとおりの返答であった。「でも、ご主人さま、僕は具合が悪くて疲れていて、今夜じゅうに戻ることは無理です。」これを聞くと彼はふたたび態度を軟化させて、夜間はセント・マイケルズにとどまることを最後には許してくれた。ただ、翌朝早くには出発するようにと言い、エプソム塩の大きな塊——奴隷に投与されるほほ唯一の薬——をわたしに飲み込ませてその指示を終えた。

仕事から逃れるためにわたしが仮病を使っていると主人トマスが思い込んでいたのも至極もつともなことであった。というのも、おそらく彼は、もし自分が奴隷の立場——自分の仕事に対する賃金も、よくやったという褒め言葉も、鞭以外に労役への動機もない——だったら、労働を逃れるためにありとあらゆる策略を試みるだろうと考えたのだ。これについてはなんら疑いもないとわたしは言おう。その理由は、世界のどこを見渡しても、奴隷所有者たちがほど激しく労働を嫌っている集団はいないからである。奴隷たちが怠慢だという非難は奴隷所有者の口からすぐさま発せられるようにいつでも準備されていて、あらゆる残忍非道な行いの言い訳の定番となっている。こうした者たちは文字どおり「背負いきれない重荷をまとめ、人の肩に載せるが、自分ではそれを動かすために、指一本貸そうともしない」のだ。

我が親切な読者たちは次の章で、ひよっとすると彼らがそこで

見出すことを期待するように導かれてきたとおりのこと——すなわち、コヴィイの圧政からのわたしの部分的な解放、そしてそれがもたらした顕著な変化についての記述——を目にするであろう。